

伊勢崎城跡 2 (群馬県伊勢崎市)

山下工業株式会社 文化財事業部 青木利文(士-383)

1. 調査の概要

伊勢崎城跡は伊勢崎駅の南にある曲輪町と大手町に立地する。本遺跡は伊勢崎駅周辺の土地区画事業に伴って、城域に該当する部分が調査の対象地となり、平成30年に行われた伊勢崎城跡1に引き続き行われた。調査は近代から近世の遺構を確認する1面と近世から中世の遺構を確認する2面の調査が行われた。

2. 伊勢崎城について

伊勢崎城は古くは赤石城とも呼ばれていたが、永禄3(1560)年に由良氏が城主となり、伊勢神宮を勧請したことが「伊勢崎」という地名の由来となる。天正元(1573)年の記録には複数の曲輪を持つ城郭であったことがうかがえる。慶長6(1601)年に稲垣氏が伊勢崎に入り伊勢崎藩となる。この時期に城は整備されるが、具体的な様子は不明である。その後、移封や前橋藩への吸収などを経て、天和元(1681)年に前橋藩の分家として、酒井氏が伊勢崎藩の藩主となり本城を藩庁とした。伊勢崎藩は小藩であったため、伊勢崎城は陣屋扱いとなっている。規模は寛政10(1798)年の「伊勢崎町古図」に描かれているものの、外堀までの表現となる。その後、酒井氏の伊勢崎藩は明治4年には廃城となり、2年後には払い下げがおこなわれ、繁華街や宅地となっていった。

3. 調査の成果

(1) 近・現代の遺構

1面では建物の基礎跡が複数確認され、1区と2区で6棟の建物が想定できた。この建物基礎の一部は伊勢崎城の堀を埋め戻した場所に建てられ、さらに現代の道路に軸角度が一致しているため、近代の道路が敷設された以後に建設されたと考えられる。この道路は明治後期の記録で「西裏通」として記載されており、明治から現代まで続く繁華街を構成した建物群と考えられる。

同面の2区では表土やカクランから多量の被熱した瓦と溶けたガラス製品、炭や炭化材が多量に出土した。これは、昭和20(1945)年8月15日未明の伊勢崎空襲により焼失した家屋を処理した痕跡と考えられる。なお、「全国主要都市戦災概況図」(第一復員省資料課 1945)によれば、2区の範囲が空襲を受けた範囲に該当している(図1)。

(2) 伊勢崎城の堀

堀は1区・2区の2面で確認された。両地点の堀は伊勢崎城の外堀に該当し、連続する遺構となる(図2)。1区は伊勢崎城の北東部の堀であるが、調査区全面が堀内であるため、堀幅や深さは不明であった。一方、2区では東門の北にある屈曲部の一部であった。

堀からの出土遺物は2区の堀では江戸後期を中心に明治初期までであり、1区の堀では江戸後期から明治時代中頃までのもので、特に1区ではガラス瓶やランプなどのガラス製品なども確認されている。このような遺物の年代の違いは堀の埋まった時期の違いによるものと考えられる。

明治18(1885)年の迅速図(図3)では1区に該当する北部の堀は表現されており、明治20年代頃まで堀が存在していたものとみられる。一方、2区を含む南部の堀は明治18(1885)年の段階ですでに埋められていることや、出土遺物が明治時代初期の段階までであることから、明治6(1873)年の払い下げの後、間もなく埋め戻されたものと考えられる。

(3) 中世の遺構

2区の2面では掘立柱建物、柵列、竪穴、井戸、墓、土坑、ピットなどが調査区の西部で確認された(写真1)。「伊勢崎城古図」(図2)によれば、堀の西側は江戸時代の土塁があった場所であり、遺構群は築城以前となる中世に該当するものと考えられる。これらの遺構群に掘立柱建物、井戸、土坑、ピットがあることから居住域と考えられる。また、土坑は長方形や円形を呈するものが複数確認され、これらは貯蔵用施設などの可能性がある。ただし長方形土坑の一部は渡来銭が出土する墓と共通の形状であり、墓域であった可能性もある。

中世遺構群からの出土遺物はわずかな量であるが、49号土坑で15世紀前半代の中国産の白磁、1号・2号墓で渡来銭のほか、ピットや土坑からはカワラケなどがあり、おおむね15世紀頃の遺構群と考えられる。

周辺では、150m西にある北小校庭遺跡1や、70m北にある伊勢崎城跡1でも中世に該当する遺構が確認されている(図4)。両遺跡では薬研堀状の区画溝や土坑・ピット群などが確認されている。今回の調査地点を含め、個々の遺跡が離れていることや調査区が狭い範囲であることから、現段階で関連は明らかではないが、これらの遺跡を含めた範囲が中世集落となる可能性がある。

参考文献

- 伊勢崎市教育委員会 2011『北小校庭遺跡1』
伊勢崎市教育委員会 2019『伊勢崎城跡1』

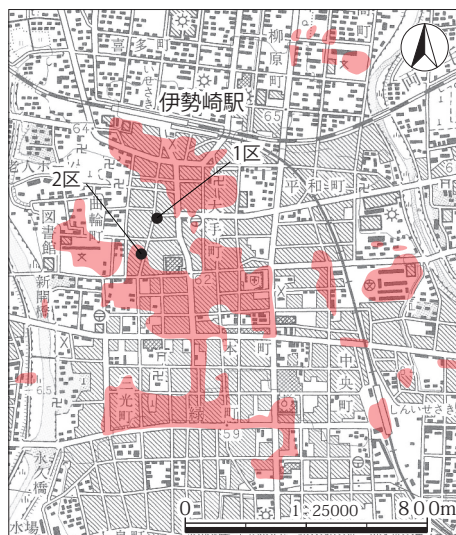


図1
伊勢崎空襲による市街地の被害状況



図2
寛政10(1798)年の伊勢崎町図(城周辺)
伊勢崎城下を示した絵図で、城の堀や道路などは比較的精度よく表現されている。城内部の表現はなく、外堀と土塁が表現されている。
※黒いマークが今回の調査区

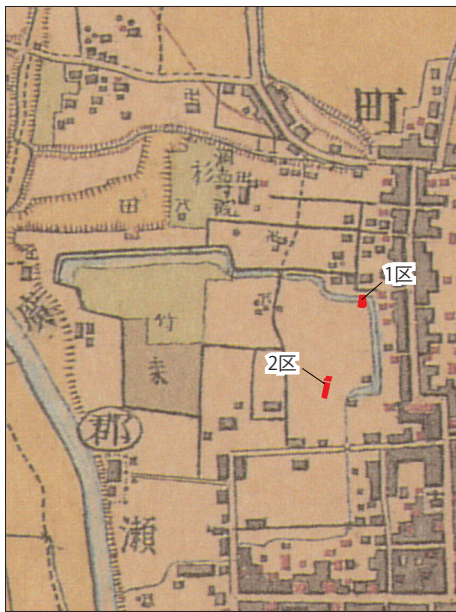


図3
「迅速図」明治18(1885)年 旧伊勢崎城の周辺
古い部分が堀の痕跡であり、旧城の北半部は堀が残されるが、南半部の堀が埋められ、細い水路表現となっている。東門や今回の調査地点は堀が埋め戻された状況となる。
※赤いマークが今回の調査区



写真1
2区2面 堀と中世の遺構

写真の右が伊勢崎城の堀。左は中世の遺構群、伊勢崎城のあった江戸時代は土塁があったものと考えられる。

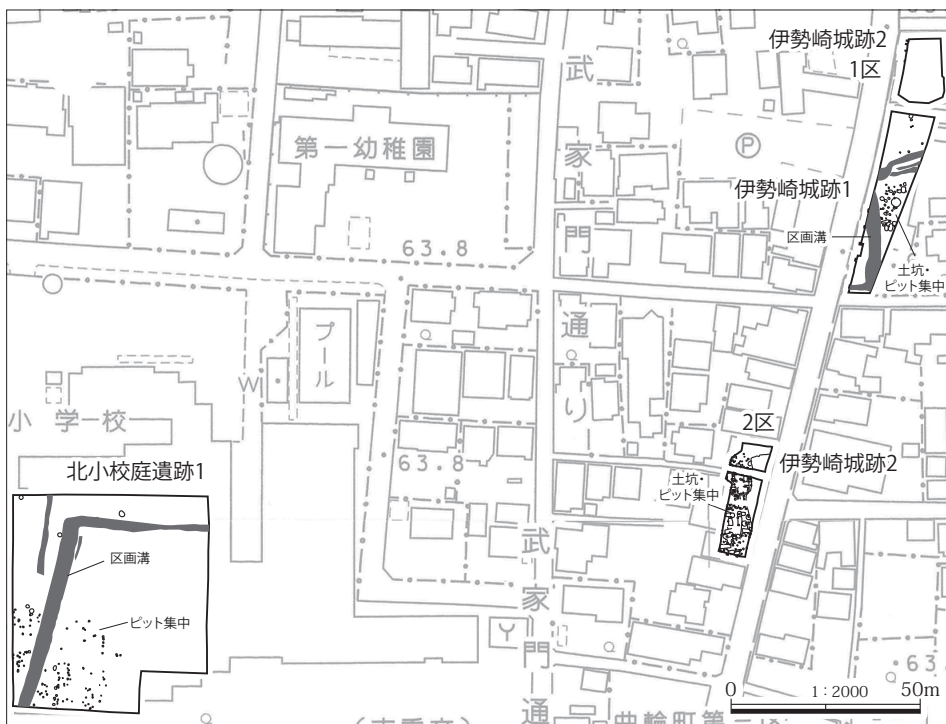


図4
伊勢崎城跡2周辺の中世遺跡分布
伊勢崎城跡1は本遺跡(伊勢崎城跡2)の間に位置する。北小校庭遺跡1は本遺跡の西に150mの箇所。両遺跡とも、区画溝とピット群、井戸などが中心である。